

マルワゴーン 静脈の町の屠禽場

山形洋一

ヤンゴン中央駅から環状線を反時計回りに進み、2つ目の駅がマルワゴーンだ。

「マルワ」(Ma Hlwa) はノウゼンカズラ科の植物で、黄色の葉が食用にされる。学名 *Markhamia stipulata* (Wall.) Seem. Ex K. Sc.だが、かつては *Dilochandrone stipulata* Benth と呼ばれたこともあり、その旧学名 *Dolichandrone* が、そのまま英語名になっている。

マルワゴーン駅のすぐ西側を流れるクリークの土手が、廃品の集積所になっているせいか、町全体が煤けて見える。だがゴミは溜まりすぎることなく、いつも適度に片づいている。ゴミ運搬用の手押し車が並んでいることもあり、ここは静脈の町。動脈のように派手に脈打つことはないが、粛々と大仕事をこなしている。若者が下水に浸かって泥の中から何かを拾う風景も、近くで見られる。

駅は環状線 2 本とマンダレー方面路線 2 本のために、2 基のプラットフォームを備え、南のヤンゴン (中央) 駅、北西のインセイン駅について重要な鉄道管理拠点となっている。駅南東には操車場があり、さまざまな貨車が留め置かれ、退避線 (Siding) の数に合わせて旧式の転轍機が並び、木の枕木も残っている。駅の脇には機関車整備場 (Loco Shed) や貨車・客車の車庫 (Coach & Wagon Shed) があり、奥にはターンテーブルもある。いささか古いデータ (JICA、1987) によれば、11 班 110 人の保安員の詰所や、マンダレー方面とマルタバン方面行きの運転手の詰所もあり、人員面でも重要な拠点だ。鉄道ファンには興味が尽きないだろう。

「鉄っちゃん」ならぬ普通人にとって見るべきものといえば、「家禽市場」(チェッ・ペー・ゼイ、Chicken & Duck Market) だろう。場所はパズンダウン・クリークのヘアピンカーブ付近で、タマイン・バヤン道路とタントゥマー道路の三叉路の東にある。ただし極度にけがれを嫌う人や、心臓の弱い人にはお勧めできない。

家禽市場には南北二つの入口がある。北口はもっぱら生きたままの売買用で、片足ずつそろえて括った雛鶏の束を、竹棒に通して担いだり、バイクのハンドルに掛けたりしている。

南口の奥に屠禽場がある。屠殺法には、イスラムの作法にのっとりた血抜きと、ミャンマー古来(?)の撲殺釜ゆでの二通りがある。



血抜き法にはムスリムの男が携わる。鳥の両翼を左手に束ねて持ち、ぶら下げた首の頸動脈にナイフを入れ、縮もうとする頭部を右手で引っ張りながら、垂れてくる血をプラスチックの円筒容器で受ける。最後は右手の親指で鳥の喉をしごいて血を絞り切る。溜めた血は自然に固まるので、血餅として非ムスリムに売るのである。

撲殺はニワトリなら左翼を左手で持ち、ぶら下がった胴体の肩甲骨のすぐ下を竹棒でたたき、ついで頭にも一撃をくらわす。ニワトリはしばらく翼や足を痙攣させているが、やがておとなしくなると、大釜に沸かした湯の中に放り込まれる。

図 1 アヒルの血抜きをするムスリムの屠禽者。右下のサインは本人のもの

アヒルは頑丈そうな体に似合わず、脊椎が柔^{やわ}やかなのか、棒など使わず拳骨で背中を殴るだけで、おとなしくなる。

中には元気な鳥がいて、順番を待たずにかご中央の丸穴から飛び出し、よろよろと舞い上がることもあるが、屠殺人は楽々とその足をつかみ、かごに戻す。野性をなくした家禽ごときの才覚では、ここを生きて出る道など、ありようがないのだ。

大釜の中身は竹の棒で何度かかき回され、やがて外に出されて、羽根をむしられる。道具立ては地獄絵さながらだが、従事しているのは鬼でもなければ、牛頭馬頭(ごずめず)でもない、どこにでもいる善良そうな若者たちで、粛々と機械的にことを運んでいる。

島崎藤村の『破戒』では、主人公・丑松の父親を角で殺した牡牛を屠殺する場面が、自然

主義の丹念さで描かれているが、ここマルワゴーンでは感傷もなければ、阿鼻叫喚も聞こえず、黙々と処理されている。その命の軽さが、いささかもの悲しい。

参考 斎藤茂吉『赤光』(大正2年)所収「地獄極楽図」(明治39年作)より録2首

浄玻璃じやうはりにあらはれにけり 脇差を差して 女を いぢめるところ

にんげんうしうまは牛馬となり岩負ひて 牛頭馬頭ごずめずどもの追ひ行くところ

一首目、「浄玻璃」とは、地獄の閻魔王えんま庁で亡者の生前における善悪の所業を映し出すという鏡のことだが、ここでは「覗きからくり」のレンズをさし、その奥に「地獄極楽図」が「あらはれにけり」という趣向だろう。「ガラス玉」などと言わず、いかめしいサンسكريットの漢音訳を用いることで、祭の夜の幻想的な雰囲気を表している。台をたたいて拍子を取りながら、しわがれ声でうなる説経節によって語られる、おどろおどろしい世界。「いぢめる」のねっちょりしたひびきが、茂吉初期の情念的な歌風を代表し、読みながらその所作をまねてみたくなる。

二首目、「負い」「追い」の同音異義語をならべて、人畜間の差別をとりはらったうえで、ひらがな書きで「にんげん」の尊厳をうばいとり、画数の多い「牛頭馬頭」の恐ろしさを強調している。人間と畜生の地位が逆転する、倒錯のイメージ。

(了)